

菟田野小だより「桜梅桃李」

No.2

令和4年 4月25日(月)

(<http://www.utano-e.ed.city.uda.nara.jp/>)

参観ありがとうございました

夏を思わせる天気の中、学習参観・学級懇談へのご参加ありがとうございました。人数制限や消毒など新型コロナウイルス感染症の対策をしながらの参観でしたが、実施できて胸をなで下ろしております。一年生は初めての参観でしたが、どの学年の子も落ち着いて学習に取り組んでいました。今年も6月にも参観授業を予定しています。また、学年委員を引き受けて下さった保護者の方にはお世話をおかけしますが、どうぞよろしくお願い致します。



一見、“障がい者の言動で周囲の人が困っている”という構図になりがちですが、いちばん困っているのは障がい者自身であり、その家族であると思います。

世界の人口の15%、約12億人が何らかの障がいと共に生きています。2006年に国連で採択された「障害者権利条約」には、障がいは個人の問題ではなく、社会の側が変わらねばならない課題であるとの視座が打ち出されています。

「障害と経済」をテーマに研究を続ける東京大学大学院の松井彰彦教授は、日常生活における「ものの見方」について、“ふつう”を問い直す重要性を訴えています。

「社会のきまりも、“平均的な人”に向けてつくられたものばかりであり、そのきまりに適応できない人が『障害者』等と認識される」と述べ、制度上は「障害者／非障害者」という基準で線引きされる場面もあるが、私たちの見方や考え方も、二分法にならないと警鐘を鳴らします。そして「たとえ同じ人間であっても、“この場面では問題ないけれども、別の場面ではサポートが必要だな”というように、柔軟に捉えていく視点が大切」と語っています。

ある先人は述べています。

「顔や体形・性格など、人それぞれ。一人として同じ人間はいません。その違いを、『排除しようとする方向』ではなく、『認め合う方向』へと『心のベクトル(方向性)』を変えていくことが大切です。『みんなく違う>って、すばらしい!』ということを教えていかねばなりません。多様性があるこそ、社会は、さまざまに力を発揮するのです」と。

学校や仕事の成績には順番があるかもしれませんが、しかし、生命に序列はつけられない。誰しもが「一番」なのです。この言うなれば“人間主義”の下、思いやる心を広げていけば、もっと優しい社会になるでしょう。



図書室に読みたい本を入れるチャンス!

昨年に引き続き、読書活動を進めていきます。「子どもたちが利用しやすい図書室」をめざして、今年も本の購入にあたり、「こんな本が読みたい!」という子どもたちのニーズに応えるべく、本のカタログを図書室に置いて、リクエストを集めています。みなさん、図書室に来て、ぜひ読んでみたい本を教えてください!



“人間主義”で、どの人も大切にされる社会を

4月2日から8日まで「発達障害啓発週間」でした。発達障がいは、生まれながらの脳の特徴により、発達に偏りがある状態のこと。広い意味では「個性」といえます。

自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)、チック症など、発達障がい者はその特徴ゆえに周囲から誤解を受けやすく、悪意がないのに結果的にトラブルにつながってしまうことは珍しくありません。